父なる神の愛に支えられて　　ローマ 8:31～39

毎年 6 月の第三日曜日、今日は「父の日」です。「母の日」は 1907 年にアメリカのジャービスさんという方がお母さんを偲んで記念会を教会でもったことがきっかけとなりました。「父の日」は 3 年後の 1910 年にこれもアメリカのある女性が男手ひとつで育ててくれた父親に感謝する記念会を持つことを教会に願い出たのがきっかけであると言われています。「母の日」があるのだから「父の日」もあってもいいのではないかということで、ついでに出来たものだそうです。「ついで」なんですよ「父の日」は？！ いじけているわけではありませんがよく、「神の愛」に似ているのは母親の子に対する愛であると言われますから男性は何か太刀打ちできない感じがいたします。それでは聖書は父母についてどのように言っているのでしょうか？　確かに人間の父親と母親を比べるとそういう気がするわけですが聖書はほとんどの場合、神は父であると言い、神の愛を父の愛として描いています。

主イエスが話された放蕩息子のたとえでは、父親が神をあらわしていますし、今朝のローマ 8 章の少し前の 14, 15 節にも、「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。…私たちは御霊によって『アバ、父。』と呼びます。」（ローマ 8:14-15）と書かれています。聖書には、多くの場合、神の愛は、父の愛として描かれています。なぜ、神の愛は「母の愛」ではなく、「父の愛」として描かれているのでしょうか。それは、なによりも、神が、実際に「父」であるからです。つまり神は御子イエス・キリストの父なのです。神は、たんに「父のような」お方であるとか、父としてふるまっておられるというだけではなく、神はイエス・キリストをひとり子として持っておられ、実際に御子イエスの父であるお方なのです。私たちは、神を「父なる神様。」と呼びますが、実際のところ、神は、まず、「イエス・キリストの父なる神」なのです。

復活された主イエスは、マグダラのマリヤに、「わたしにすがりついていてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」（ヨハネ 20:17）と言われました。「わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神」という言葉は、本来はイエス・キリストの父であるお方を、イエス・キリストによって、はじめて、父とすることができる、本来はイエス・キリストの神であるお方が、イエス・キリストの救いによって、私たちの神となってくださるということを語っています。神は、イエス・キリストの父であるからこそ、私たちの父ともなってくださることができたのです。こうも言えます。私たちはイエス・キリストを信じているので神様を天の父なる神様と呼ぶことが出来るのです。キリストを抜きにして神様を父なる神とは呼べないのです。

私たちは、「神は愛なり。」と言う時、神の人間に対する愛を考えます。確かに神は、私たち人間を愛してくださいました。しかし、「神は愛なり。」というのは、神の永遠のご性質を言い表わすことばですから、神は、人間を造られる前も、神は愛であり、神は誰かを愛しておられたのです。その「誰か」とは、御子イエス・キリストのことです。「神の愛は永遠である。」と言いますが、神はその永遠のはじまりから御子を愛しておられました。この大宇宙や地球がいつ造られたのか、誰にもはっきりとは分かりません。それは、今まで言われてきたよりももっと最近に造られたのかもしれませんし、気が遠くなるような昔に造られたのかもしれません。しかし、それがどんなに昔であったとしても、永遠の神にとっては、ほんの最近の出来事にすぎません。神にとっては「一日は千年のようであり、千年は一日のよう」（ペテロ第二 3:8）だからです。神は、人間を造り、人間を愛される以前から御子を愛しておられました。神が人間を愛された期間にくらべれば、御子を愛しておられた期間はもっと長いのです。神は、人間を造られた時から、愛

することを始められたのではなく、永遠のはじめから御子を愛しておられたのです。

主イエスはヨハネ 15:9 で、ご自分の弟子たちに「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。」と言われましたが、これは、父なる神が御子を愛された愛で、主イエスが私たちを愛してくださったということを言っています。言い換えれば、神が、まるで、御子イエス・キリストを愛するかのように、私たちを愛していてくださっているということです。このような神の愛は、私たちの思いをはるかに越えています。聖書は「私たちが神の子どもと呼ばれるために、…御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。」（ヨハネ第一 3:1）と言っています。この神の愛の広さ、大きさを、立ち止まって静かに考えてみたことがあるでしょうか。この神の愛を少しでも考えることができたなら、私たちは、劣等感から解放され、人をうらやんだり、ねたんだりせずに、自信をもって人生を生きることができるようになります。あの人より、多い少ない、あの人より自分は幸せだ、不幸だ等、神が私に与えてくださっている愛の深さ広さが分かれば何も気にならないのです。あなたは、すでに、この神の愛を受け取っているでしょうか。

ヨハネ 1:12 には「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とあります。イエス・キリストをあなたの救い主として、あなたの心と人生に迎え入れる時、あなたは、神の子どもとされるのです。御子イエス・キリストの父が、あなたの父なる神となり、あなたは、父なる神の子どもとなって、父の愛を受けるのです。父が御子を愛された愛で愛されるのです。世の中の愛は、親子の愛、夫婦の愛であっても移り変わっていきます。愛し合っていたはずの身内が憎しみあったりすることもあるのです。しかし、神の愛は変わることはありません。神は、ひとたび神の子どもとした者を決して見捨てることはないのです。神は、人間の父親、母親に勝る愛、変わらない愛で私たちを愛してくださっているのです。

父なる神の愛は、御子を愛した愛でした。「神が御子を愛した愛で、私たちを愛してくださっている。」—このことだけでも、私たちにとっては、嬉しいことですが完全に、理解はできません。それにもかかわらず聖書は、それ以上のことを教えています。父なる神が、愛してやまないその御子を犠牲にしてまでも、私たちを愛してくださったというのです。ほんものの愛は、愛する者をけっして見放すことなく、捨てることなく、最後まで守り通します。ところが、神は、最愛の御子を、見捨て、十字架の上で罪人として死なせました。キリストの十字架の死、神の御子が罪びととなって、苦しみぬいたあげく息絶えていくということは、人間の頭だけで考えても、その意味は分かりません。最愛の者をそんな目に合わせるなんてひどいにも程がある。普通に考えれば十字架は、歴史の中で最も悲惨な出来事、解く事のできない謎で終わってしまいます。しかし、聖書は、それは、神が人間への愛のゆえに、あなたへの愛のゆえになさったことだと教えています。ヨハネ 3:16 は言っています。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠の命を持つためである。」神は、御子を、罪人である私たちの身代わりに十字架に死なせたのです。ここで、御子は、神の「ひとり子」と呼ばれています。神の御子は、何人もいるわけではなく、もちろん、おひとりなのですが、わざわざ「ひとり子」と書かれているのは、御子が、いかに、神にとって、かけがえのないお方であるかを言い表しています。神は、かけがえのないひとり子を犠牲にしてまで、私たちを愛してくださったというのが、ヨハネ 3:16 の教えるところです。神の御子に対する愛を少しでも理解できたなら、その御子を与えてまで、つまり罪からくる罰として十字架に死なせてまで罪人を救おうとされた神の愛がどんなに大きいものであるかがわかるはずです。

母親の愛は、どちらかと言えば、持っているものを守ろうとする愛です。やや内向きです。家を守り、家族を守ろうとします。しかし、父親の愛は、持っているものを手放してまでも、相手を愛するという面があります。いつの時代にも、父親たちは、国を守るため、家族を守るため、また、他の人を守るために、あえて、犠牲を払って危険な場所にも出て行きました。神の愛が「父の愛」と呼ばれるのは、人間を罪から救い出すために御子を犠牲にすることもいとわなかった、その愛のゆえでもあるのです。

私たちは、ご自分の御子を手放した神の愛によって救われています。この愛によって、人生に勝利を得ることができるのです。ローマ 8:32 に「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」とあります。キリストの十字架の死が、自分の罪のためであったと認めない人には、それはまったく無意味なものかもしれませんが、そこに神の大きな愛を見る者たちには、十字架は勝利のしるしなのです。御子をさえ、私たちに与えてくださった神が、私たちの人生に必要な他のものをくださらないわけがありません。ローマ 8:37 に「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」とあります。どうにか勝てたではなく圧勝したというのです。続く 38-39 節はこう言っています。「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」「死も、いのちも」というのは、死ぬに死ねず、生きるに生きられない、死ぬのも嫌だし、さりとて生きることも辛いというせっぱつまった状況を表していると思われます。「御使いも、権威ある者も」というのは、目に見えない霊的な世界を表しているのでしょう。「今あるものも、後に来るものも」という言葉に、今ある問題に苦しみ、後に来るわざわいを心配する人間の姿を見ます。「力ある者」はこの世の権力者を表しているのでしょうか。「高さも、深さも」ということによって、世界の全てが含まれるのでしょう。しかし、聖書は、こうしたものは被造物にすぎないと言い切っています。それがどんなに大きく見えても強く思えても、しょせんは造られたものにすぎない、どんな被造物も創造者に立ち向かうことはできないのです。この確信はどこから来るのでしょうか。創造者と被造物とを区別できたからといって、それでこうした確信がやってくるわけではありません。それは、創造者である神が、イエス・キリストの御父であり、私の父となってくださり、その父としての愛で私たちを愛してくださっていることを信じる信仰から来るのです。神の愛を知る者は、私たちの理解を越えるような問題や、手に負えない困難がやって来ても、そうしたものが「私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできない」との確信を持つことができるのです。この神の愛によって、この世を力強く生き抜くことができるのです。

現実の中で自分の父親が尊敬すべき存在である方がおられることでしょう。それはそれで素晴らしいことだと思います。中には父親がそういう存在でない場合もあるでしょう。しかし、自分の父親、母親がどのような人であるかは問題ではないのです。聖書はキリストを信じる者は御子をさえ、十字架につけてまで私たちを救い出そうとしてくださる、その父としての愛で私たちを愛してくださるという、そんなお方が父でいてくださるというのです。どうか今週も父なる神の絶大な愛に支えられて厳しい日々を過ごしぬいてゆきたいと思います。